第33回学術集会を振り返って

がん登録実務者・研究者の熱意と、将来のがん登録へ期待

TAMURA Kenji
田村 研治
島根大学医学部附属病院

2024年6月13日～15日に、日本がん登録協議会第33回学術集会を、出雲市で開催いたしました。実務者研修会は249名、本体学術集会の事前登録は306名、これに当日参加者、後日オンデマンド参加者などを含めますと、339名の皆様にご参加いただきました。

学術集会のテーマを「がん登録推進法改正に寄せる期待」としました。

日本のがん登録は、国立がん研究センターが受託している「全国がん登録」と、医療機関が実施している「院内がん登録」に分かれます。2つのがん登録には部分的に整合性の不備がありシームレスな運用が求められます。又、データを医療施策や研究に利活用するためには、全国がん登録（匿名化情報）のさらなる透明化と院内がん登録データ利用手続きの簡略化が求められます。安定的ながん登録運営のためには、実務者の雇用条件の改善と人材育成が必要です。本学術集会では、「がん登録推進法改正」の動向をふまえ、厚生労働省、国立がん研究センター、がん登録協議会、医療従事者、がん登録実務者、がん患者（会）などが一同に会し、それぞれの立場で問題点を徹底的に議論することを目標としました。

がん登録実務者研修会は、初日の6月13日に行われました。予想を超え多くの方々にご参加いただき、会議室・サテライト会場は満室となりました。一般演題として、口演を14演題、ポスターを36演題採択いたしました。口演では、希少がん患者、多重がん患者、がんサバイバーなどに関するがん登録の在り方や COVID-19の事業への影響、地域でのがん登録の問題など、様々な視点からの研究が発表されました。ポスター発表は6月15日の朝に行われました。登録実務者が行う研究からは、自分の関わる院内がん登録データを、いかにしてがん医療に生かせないかという、真摯で前向きな熱意を感じました。

学術委員会企画シンポジウムでは、「第4期がん対策推進計画におけるがん登録の活用」のテーマでご講演いただきました。推進計画の求める一次・二次予防、ライフワーク（小児、AYA世代、高齢者）別対策などのアウトカムにデータを利活用できるかが議論となりました。

学術集会企画シンポジウムでは、本学術集会の「がん登録推進法改正に寄せる期待」がテーマです。改訂にむけた「中間とりまとめ」の内容、がん登録の照合・集約の問題、又、がん患者の立場から、臨床研究への利活用について議論しました。

がん登録を用いた国際共同研究のセッションも企画し、データベースの標準化・デジタル化のためのシステム導入が必要なことを学びました。

最終日に行われた市民公開講座では、「がん教育とがん登録～がんデータを教育に活かすために」のテーマでご講演いただきました。中学生、高校生に対するがん教育の在り方に加え、学校教員の立場から、あるいは、がんサバイバーの立場から、現場のがん教育の本音を伺うことができました。

今回の学術集会では、出雲縁結び空港と出雲市駅に学術集会の立て看板を、出雲市駅から会場までシャトルバスを用意いたしました。1F大ホールのステージには、石見神楽の「ヤマタノオロチ」のオブジェが飾られ、会場内には松江市特産の和菓子の販売店をおきました。又、懇親会では、出雲市特産の日本酒やワインを用意しました。

学術集会を通じて感じたことは、日本のがん登録の精度の高さと、実務者の熱意です。全国と院内がん登録の整合、疫学・臨床研究への利活用には、いくつかのハードルがあることもわかりました。それぞれの専門分野、職種、学術団体の壁を取り除き情報共有と議論すること、又、国際的な状況を把握することにより、比較的几帳面な気質の日本人によるデータが、日本のみならず世界のがん患者さんに恩恵を与えることができるのではないかと感じました。関係者の皆様に感謝するとともに、日本のがん登録を推進するがん登録協議会の発展を祈念いたします。